



# 男は 痛い !

國友万裕

第31回

『岬の兄妹』

## 1. 人は死んでいく。

ある火曜日。俺は大学の廊下の長椅子に座って、ぼーっとしていた。疲れが溜まっているのと体調不良で放心状態だった。そのとき、突然、「國友さん」とある男の先生が話しかけてきた。「何なんですか???」。その先生とは控え室では話をするのだが、わざわざ廊下にまで話しかけに来るなんて、何があったのか。

「●●先生の妹さんから葉書が来たんです。亡くなったみたいですよ。」と葉書を見せてくれた。

「えーっ、まだ70代半ばくらいですよ。早いですよね」

「去年の暮れだったみたいです。僕は年賀状を出していたから、連絡が来たんです」

亡くなったその先生は6年くらい前に定年になられて、それを機に生まれ故郷に帰ることを決心なさったのだった。女の先生なのだが、独身の非常勤の先生で、とても個性的な先生だった。究極のエコ生活だと常日頃おっしゃっていた。電気代やガス代を基本料金すれすれにしか使っていない。お風呂は隣が銭湯だからそこで済ます。着るものは全て手製。もちろんパソコンや携帯なんて持っていない。彼女が定年になったのはちょうど大学が完全にウェブ化に変わっていく直前でもあった。今は成績やシラバス、その他諸々の連絡事項も全てウェブやメールになってきている。したがって、彼女のような先生は今だったらやっつけられないだろう。

だいぶ前にバッテリー道でお会いした時にはカートを引いておられた。廃品回収に行くの

だとおっしゃっていた。最後にお会いした時もプレゼントとしてくれたのはカラフルホッチキスの芯とお魚のレトルト惣菜、両方とも100円ショップで売っている類のものだった。彼女らしかった。その時は、先の先生が送別会をしようと言い出して、3人で食事をしたのだが、せっかく高いお店で奢ってあげようとしているのに、彼女はほとんど食べようとしない。お酒は多少嗜まれる。でも、基本的に食べるのは嫌いで、学食で食べても残してしまうので、それをタッパーでもって帰って、次の食事にするとおっしゃっていた。食費もほとんどかけていらっしやらない。ノートに新聞の切り抜きをしたり、廃品でぬいぐるみを作ったりするのが楽しみみたいだった。

彼女がなぜこういう生活をするようになったのか。そこまで詮索はしないほうがいいと思った。人によって生きる縁は違っている。俺だって、第三者から見れば、変な縁にこだわって生きているのだ。

翌朝、ラインが来ていた。一番親しい先生からだ。「今朝、父がなくなりました」。彼のお父さんが近いうちになくなりそうであることは聞いていた。もう80代半ばだし、早死というのでもない。仕方がないのだけれど、続けて訃報を耳にするとなんとなく気が滅入る。そういえば、俺と同じ年のアメリカ人の友人も、先日お母さんの容態が悪くて帰省されたばかりなのに、今度は奥さんも連れて、再びアメリカに帰られたらしい。一時期は回復したお母さんの容態がまた悪化したとのことである。奥さんも連れて行くということは、もうお母さんは危ないということなのかもしれない。

どんな偉い人でも、どんな悪いやつでも、

いつかは死んでいく。西城秀樹が死に、さくらももこが死に、樹木希林が死に、内田裕也が死に、萩原健一も死んだ。人は誰であっても死ぬんだから、それは仕方のないことなのだ。

俺だっていよいよ55歳になった。残りの人生の方が、今まで生きてきた人生よりも確実に短い。これからは身体も知力も衰えていくだろう。俺の残りの人生何が起きるのか。生きていても得るものはあるのか、幸せな出会いはあるのか、それを考えてしまう。これからは、大きなことを目指すよりも、日々の小さな発見に焦点を移さなくてはならない時なのかもしれないのだ。

死んだら魂はどこへ行くのだろう。自分の存在が無になってしまうのは怖い。しかし、死後の世界のことなんて、誰にも確実なことはわからないのだ。アメリカの人は天国の存在を信じている人が多いと聞くが、天国があると思わなければ、死を受け入れることはできない。そして、善行を施すものが天国に行くのだと信じていなければ、人間界は悪行ばかりになってしまう。

俺の周りにはこいつらは地獄に落ちるのは怖くないのかと思うくらい、涼しい顔で不道德なことをやってのける人間はいっぱいいる。その一方で天使のようにやさしい人が短命で死んでいくこともある。俺はそういう世の理不尽を若い頃は嘆いていた。しかし、この頃は、この世は理不尽がはびこるところと割り切って、見据える年齢になってきたのだった。

この世の理不尽はなぜ起きるのか？俺は、死んだ後に神様がその答えを教えてくれるのではないかと考えている。そのためには天寿をまっとうしなくてはならないと思っている。

そう考えれば、その時が来るまで精一杯に生きたいと思い、死ぬことも怖くなくなってくるのだった

## 2. ゲイでもいいよ。

3月の終わり。今年、卒業したばかりの女の子3人と大阪で会った。ある大学の教え子だ。最初に大阪の駅前ビルの地下のトンテキ屋に行った。女の子の一人が言うには、ここはいつも混んでいて入れないらしい。彼女たち自身も行ったことはないみたいだった。美味しかった。おかわり自由のお店なので、女の子の一人はお代わりしていた。スポーツ系の子だからということもあるのだろうが、昔は、女の子はお代わりとかしていなかったなあー。ジェンダーは徐々に変わっているのだ。その後、パフェにも付き合うことになった。

女の子が3人ということになると男はイジメられる。あれこれ危ない話をふってこられる。これってセクハラなのだけど、今回は彼女たちの卒業祝いでもあるし、あえてイジメられることも仕方がないと割り切っていた。あれこれ話しているうちに、どうやら彼女たちは俺のことをゲイだと思っていることが、はっきりとわかった。俺は授業でジェンダーやセクシュアリティ関連のテキストを使うし、『ブロークバック・マウンテン』の男二人のラブシーンをDVDで見せたりもする。LGBTに詳しい先生なんて、そうそういないし、その上、結婚もしていない、子供もいないとなれば、当然ゲイだと思うのだろう。しかも、俺が出した本のタイトルは『マッチョになりたい！？』。表紙はボディビルダーの裸の絵である。マッチョ好きの先生と彼女たちは思っ

ているみたいだった。

「先生、私たちは理解あるタイプなんだから笑」とそれをほのめかすようなことを何度も言われた。

ゲイの疑いをかけられることは初めてではない。俺はこういう時には否定も肯定もしないことにしている。ゲイだと思っているんだったら、それはそれでいいよ。仮に俺がストレートであろうが、ゲイであろうが、そんなのは俺のアイデンティティの一部に過ぎないんだから、大きな問題じゃないんだ、どっちも思ってくれても構わないという態度をとることにしている。

まあ女性恐怖症であることは事実だし、男と付き合っている方が遥かに楽だ。女と付き合うのは大変だろう。女性だと何か起きた場合は男の責任になる。子供ができたりとかしたら、結婚してあげなくてはならない可能性もある。いくら共働きの世の中になってきたとは言っても、自分の方が稼がなくてはというプレッシャーはまだまだ男にはかかってくるんだよ。他のお家の子供が私立の学校に通っているのに、自分の子は公立にしか行かせられないとしたら、男としては惨めなんだよねー。

学生と食事をする場合でも、女の子の場合だと些細なことでセクハラやパワハラの言いがかりをかけられるのではないかとヒヤヒヤしながら付き合わなきゃいけない。男の子だったら、仮に俺がゲイだとしてもちょっとしたことで問題になることはない。男って、女と付き合うときは、大概は虚勢を張ったり、カッコつけたりする。俺は強がるのは大嫌いなんだ。だから女の子とも付き合いたくないんだよ。

こういう話をすると、「へー、男の人って、そんなものなんですか？」女の子たちは大概はそういう反応をするのだ。まだまだ男性運動は日本では始まっていない。したがって、男のジェンダーに対する情報が彼女たちには伝わっていないのである。

『82 年生まれ、キム・ジョン』という本が話題だ。韓国のフェミニスト小説でベストセラーになっているようだ。俺の FB で繋がっている人たちは結構みんな読んでいて、書店でも目立った位置に置かれている。読んでみると、一気に読める本で面白いことは面白いが、特別真新しいところのある本ではない。これくらいのことはこれまでフェミニストたちが、長年訴えてきたことであった。田嶋陽子の『愛と言う名の支配』と大して変わらない。

むしろ、俺はちょっと憤慨だった。韓国は男子にのみ兵役を課している。しかも韓国の場合は良心的兵役拒否がないので、行かなかつたら刑務所行きである。しかも、韓国の軍隊は過酷で、刑務所の方がマシという話も聞いたことがあった。そんな国にあって、女性差別されたからって文句は言えない。男と女はシーソーのバランスで、男性差別の酷い国は当然女性差別も酷くなる。そのことをあるジェンダーの先生に訴えたところ、「韓国では兵役に反発する男性たちの運動が起きていて、反フェミニズムの運動となっているんだ。それに対する反動として、こういうフェミニズム本が出てきたのだ」とのことだった。実際、この本のあとがきにもそのことには触れられている。

では、日本ではなぜ、男性差別の方は紹介しないで、フェミニスト本の方のみが話題に

なるのか。この本は男性差別の訴えに対する女性からのレスポンスなわけで、元となっているのは男性差別。そこに触れず、女性問題の方が一人歩きしてしまったら、日本の女性たちが変な影響を受けてしまう。日本では男性差別の本なんて出しても誰も買う人はいないし、話題にもならないから出さないのだろうが、困ったものなのである。

### 3. 男たちの旅は終わらない

ある日の午後、控え室である男の先生が言った。

「僕は 60 代くらいでぼっくり死ねればと思っているんですよ。70 くらいになったら他の問題が出てくるでしょう。頭がボケたり、身体が悪くなったり…」

その先生は俺と同年代なので、60 代で死ぬとなったらあと残りわずかだ。

「70 代くらいまではまだ大丈夫ですよ。今は人生長いから。僕はこの前、手相を見てもらったら、生命線が長いから長生きだと言われたんです」と俺は話を返した。

「はー、そうですね(笑)」とその先生。

「短くはなさそうですね」と 40 くらいの男の先生も口挟んできた。

どうやら、その先生たちは、俺が長生きするタイプだと思っているみたいだった。なぜ、そう思うのか。俺は、悩みは多いし、心配性だ。だけど、そうは見えないらしい。

その先生が 60 代くらいで死にたいという気持ちはわからなくはない。その先生は独身で、仕事も非常勤で俺と似たような立場である。50 代の半ばにもなってくると、もう人生の先が見えてくる。家族がいる人だったら、もう

ひと頑張りしなくてはという気持ちにもなるのだろうが、独身の人の場合は、この後、孤独に老けていくだけで、自分がいないと困る人もいないし、新たに人生得るものがあるのかという気持ちにもなってくる。

50代の男性が、一番自殺が多いと言われていたが、必ずしも人生に絶望しての悲惨な死に方ではなく、「もう良いか、人生も十分に味わったし、そろそろ逝くか」というノリで自殺する人も多いのかもしれない。人は、いつかは死ぬんだし、50代にもなれば、20年、30年なんて瞬く間に過ぎていくことはわかっている。そして、これからの人生はおそらく下り坂に向かっていくことも目に見えているのだ。

女性の場合は、定年になっても、したいことがたくさんあるという人が多い。だけど、男は、もはや社会的な向上が望めなくなれば、人生終わったも一緒ということなのだろうか。一般に男は暇なときに何をしたいかわからなくなるのだ。やはり得しているのは女性なのだ。

フェミニストが言うように政治家や管理職は依然として男ばかりだ。しかし、政治家や管理職になりたいと思う女がどれだけの数いるだろうか。男だってなりたいと思う人は少ないだろう。政治家なんかになったら汚いこともたくさんしなきゃいけないし、責任も重くなる。

むしろ、若い人が憧れる職業といえば、芸術家とか、自分のこだわりの店を開くとか、趣味を仕事にするとか、そういう生き方なのではないか。そして、そういう生き方は往々にして安定しないし、お金にならない。となると、男性よりも女性の方が夢を追いやすいと

いうことにもなる。女は家族を養うという使命がないから、収入の少ない仕事にもつくことができる。しかし、男の場合は将来の収入のことを考えて、最初から大きな会社に就職しようとする。そこに悲劇が始まるのだ。

俺は英語の授業で、ジェンダー関連のテキストを使っているのだが、女子たちの中には成人式や卒業式で着物を着るのが絶対に嫌だという子もクラスに何人かいるという発見があった。おそらく着物を着る子の中にも、皆と同じでいたいから着物を着るけど、本音を言えば、着たいとは思わないという子も少なからずいるはずだ。ジェンダーへの反発もあるだろうし、自分のキャラに合わないから嫌だと思っている子もいる。

男の場合もそうなのである。周りの男たちから逸れたくないから、男のふりをするけども、実際にはそれが自分の本音ではないという学生も少なからずいるに違いない。いや、むしろそういう男の方が多いだろう。男は、男の群れから外れるのが怖いのだ。俺は子供の頃から群れから離れた子羊だった。その惨めさは計り知れないようなものだった。男たちは、そのことがわかっている。したがって、ジェンダー規範に沿った生き方を結局は選んでしまうのである。

女性の場合は、昔に比べて、既得権は相当増えたはずだ。少なくとも彼女たちのお母さんの世代に比べれば、たくさん自由を満喫できる。しかし、男は自由になっただろうか。確かに今の男子は俺たちの頃よりも幸せな面もある。この頃は転職屋が増えていて、3年くらいで仕事を移るのは当たり前のことになってきている。今の若い人は、大学を卒業した後、10年くらい後に目標を持っていて、それ

までにいくつか仕事を経験し、世の中のことを学んで、自分の経験を積んで、それから 30 くらいで落ち着くという人生設計を立てている子が多いのだそうだ。しかし、自分のお父さんやおじいちゃんよりも出世できる人は少ないだろう。もちろん、出世が男の人生というわけではないが、新しい生き方が見つからない以上は仕事をプライオリティにするしかない。

男たちの旅路は果てしなく続くのである。

#### 4. ゲイドラマが熱い！

このところ、ゲイドラマが熱い。俺の家にはテレビがないのだが、ネット配信で観ることができるので、できる限り見るように努力している。

『おっさんずラブ』は、今年の流行語大賞でも選ばれた。人気ドラマだ。何よりも面白いのは、主人公が、彼に首ったけの上司と同居し始めるくだりだろう。もちろん、これはおかしい面もあるのだ。ゲイではない彼が同性愛に目覚めるということなのか・・・??? 目覚めたようには見えないのだけど…。まあ、これは、どうでもいいのかもしれないのである。男女の場合でもセックスだけが結婚じゃない。むしろ、結婚してしまうとパートナーへの性欲は感じなくなる。他の女性にだったら性欲を感じるけども、自分の奥さんとセックスをしたいとは思わないという男性は極めて多い。恋愛感情だっていつまでも続くものじゃない。そうであるのならば、自分の気の合う男（彼がゲイであれ、ストレートであれ）と同居して、暮らしていくことも悪いことじゃない。主役の田中圭がおっとりした偏見の

ないタイプの男なので、こういうストーリーもあっていいかという気持ちにさせられる。

『きのう何食べた？』は、西島秀俊と内野聖陽が同居しているゲイカップルを演じている。おそらくゲイのことをよく知っている人が脚本を書いていて、いかにもゲイ的な性格づけやエピソードが描かれて、とても面白い。西島も好演だが、感心させられるのは、内野のゲイ演技のうまさである。彼のほうがネコのゲイなのだが、完全に女性というのでもない。さりげない仕草や言葉、表情にゲイを匂わせていく。しかし、彼が上手く演じれば演じるほど、ゲイのステレオタイプを強めるような気がして、痛し痒しである。

一方で、『俺のスカートどこ行った？』はいただけなかった。男がスカートを履くのは大いに結構だが、主人公のキャラが気に食わない。

まだまだ問題はまだ山積だが、ゲイのドラマが多くなることは、LGBT の解放のためには好ましいことだ。ただ、LGBT とそうでない人との間にはっきりした境界線を引いてしまうのは間違いである。LGBT と自認している人に「男らしくしろ」「女らしくしろ」とジェンダーを強制してはならないのだということは世の中で理解されるようになってきた。しかし、ストレートの人でもジェンダーを強制されることには反発する人はたくさんいるのだから、LGBT の人には配慮するけど、そうでない人には無配慮で構わないとなってしまうのは困る。その部分をよくわかっていない人は多い。本当にジェンダーは人によって意識に差があるのだ。こんなものに囚われてしまった自分を恨むなあー。

## 5. 『岬の兄妹』(片山慎三監督)

イオンシネマ桂川で、『岬の兄妹』という映画を見た。ここは俺の住んでいるところからは行きづらいのだが、この映画はここでもかやっていなかったし、何よりも55歳になった記念として、ここで映画を見ようと思った。イオンシネマはハッピー55という割引をしていて、55歳からシニア料金なのである。つくづく、俺もおじいさんだ。

人生の秋になってきて、これまでの人生で何を心得、何が得られなかったのか、考えてしまう。俺は俗世間で言うような成功や幸せは得られなかった。俺は家族も持つことはできなかった。でも、最初からそんなもの欲しいとは思っていなかったのだ。妻子がいたら自由がなくなる、お金も使えなくなる、責任も重くなる。まして日本の家はウサギ小屋だから、そこに子供やら妻がいたのでは自分の居場所も持てない。しかし、今から20年くらい前までは、俺の歳になって独身の男なんてほとんどいなかったようにも思う。その頃までは、女は結婚しなくても、「仕事がしたいから」「男は懲り懲りだから」と言ってしまうと、言い訳が立つ。一方で、男は結婚する方がたくさんの恩恵を得られるのだという社会通念があるため、結婚しない男は変人扱いだった。しかし、時代は変わった。今は女の生涯未婚率よりも、男の生涯未婚率の方がはるかに高い。男の4人に一人は一生結婚しない時代だ。未婚男性に対する世間の風当たりは柔らかくなった。

俺は、この年まで仕事は非常勤を貫いてきた。俺はこだわりの強い性格なので、専任になれるのであればどこでもいいという気持

ちにはなれず、就職活動もしなかったのだが、55までどうにかやってきた。その間、お金がなくて100円使うのも躊躇した時期もあったが、日本育英会(日本学生支援機構)の奨学金も返済し、税金も年金も健康保険も払ってきた。何よりも非常勤の場合は学生たちに教えていればそれで済む。他の先生たちとの確執などもないため、ある面気楽だ。しかも、徐々に俺の非常勤の仕事は良くなっていった。非常勤を始めたばかりの頃は片道2時間半もかけて大阪の狭山の大学で教えたりしていたので、大変だった。今は5つの大学で教えているが、すべて京都の大学なので、通勤にも時間はかからない。条件的にもいいところばかりだ。社会全体を見ても、この20年くらいで契約社員や非正規雇用が増えたため、非常勤であることが昔ほどマイノリティではなくなった。非正規であることを惨めに感じる必要はなくなったのだ。

故郷を愛せないこと、母校と上手くいかなかったことも、今思えば、それでよかったのだ。俺は子供の頃から東京で暮らすのが夢だった。その夢は叶わなかったけど、どうやら自分の居場所が京都にできてきた。37年も住んでいれば、京都アイデンティティは出来ていく。その一方で、東京にも親しい人たちがたくさんできたため、東京との繋がりもでき、埼玉におばさんがいることもあって、東京にも年に1、2度は行けるようになった。

前にも書いた通り、俺は立命館と上手く行かなかったのだが、それも良かったのかもしれない。立命館にずっと残っていた方が、生え抜きだから恩恵を得られる面もあったかもしれないが、逆に上手くいかなかった場合はより悲惨なことになっていただろう。今で

は、大学時代の指導教授からのアカハラも、クラスメートの女子たちからの悪口も、過去の思い出になってしまった。一時期は衣笠界限まで来るのも嫌なほど、わだかまりは強かったが、今は対人援助学会の大会にも参加できるようになった。

俺には素晴らしい母と弟がいる。俺には素晴らしい親友もいる。構ってくれる教え子もたくさんいる。狭い世界しか生きられない、こだわりの強い性格の俺をずっと支えてくれた人たちがいるのだ。本も2冊出した。昔はスポーツ音痴で悩んだけど、今はそんなこともない。行きつけの喫茶店も何軒もあるし、それぞれのお店のマダム達は俺をお得意さんとして迎えてくれる。映画はくまなく見てきた。本も山のように読んできた。アメリカにも1年は留学した。英語だって、日常生活に支障のない程度には話せるし、翻訳の仕事の経験もある。ナイーブだと言われる、擦れていないと言われる。いい人だと言われる。

俺の人生、決して、恵まれない人生ではなかったのである。

## 閑話休題

映画の方は期待していたほどではなかった。ここまで悲惨な話にしてしまうと救いようがない。貧しい兄妹の話なのだが、兄は足が悪く、妹は精神障害である。お金がなくて、ティッシュを食べるくらいの極貧生活で、仕方なく兄は妹に売春させることになる。

どう考えてもおかしな話なのだ。精神障害者の妹と足の悪い兄となれば、間違いなく生活保護がおきるだろう。なぜ、福祉の人に相談に行かないのか。俺はそのことにイライラ

しながら映画を見ていた。妹が妊娠してしまい、中絶のお金がないから兄が妹のお腹をブロックで殴って、流産させようとする場面が出てくるが、明らかに育てる能力のない女性なわけだから、福祉の人に相談すれば、これをほっとくということはないだろう。何らかの援助をしてくれるはずだ。なのに???

とはいうものの、この映画、ネットでの評価は悪くない。こういう底辺の人を見ると、自分はまだマシだと思って、ほっとする人がいるのかもしれない。俺だって昔は他人の不幸が嬉しかった。しかし、今の俺はそういう時期は乗り越えた。幸せなんて、相対的なものだから、はたからみたら不幸に見えても不幸じゃない人もいるし、その逆も然りである。単純に経済的、身体的、家族的に恵まれている人が幸せとは限らない。そういうことのみで幸せの尺度をはかることが間違いなのだ。そのことに俺は気づき始めた。もはや、幸せの規範なんて、存在しない時代に入ってきている。

俺の人生は規範からは逸れているけれど、これで幸せなのだ。痛みも含めて自分の人生を抱きしめようと思う笑。